

赤谷森林ふれあい推進センター  
自然再生指導官 藤木 久司  
群馬県林業試験場企画・自然環境係  
主任研究員 坂庭 浩之

## 1 課題を取り上げた背景

森林におけるニホンジカの摂食による被害は、生物多様性の低下につながるるとともに、高山植物をはじめ、豊かな自然を観光資源としている地域に経済的な悪影響を及ぼす結果となっている。さらに、植生が回復できずに裸地化し、やがては土砂の流出や山体崩壊に至るなど国土保全の上でも重大な影響が見られている。また、人間の生活圏では、農林業被害や交通事故などの生活への被害が生じるなど、社会的・経済的にニホンジカによる被害への対策が全国的に大きな課題となっており、森林管理においてニホンジカによる被害への対策は必要不可欠となっている。

赤谷プロジェクトでは、平成25年度に実施したニホンジカによる植生への影響と動向についての現状評価を踏まえ、「エリア内のニホンジカ個体群を『低密度で維持』する」ことを管理目標に掲げて、地域の多様なステークスホルダーと連携した取組を進めている。

一方、低密度下にあるニホンジカを、安全や負担軽減を確保しながら効率的かつ効果的に捕獲するための知見は現時点ではなく、このような条件での捕獲手法の確立に向けて取り組むこととした。

## 2 具体的な取組

ニホンジカを捕獲する手法としては、猟銃による捕獲やくくりわななどのわなによる捕獲が考えられるが、比較的簡単に免許取得や捕獲器具の購入・保管が可能なくくりわなによる捕獲について、効果的かつ効率的な手法を検討することとした。

群馬県林業試験場の坂庭氏が研究している誘引捕獲手法は、赤城山など高密度下のニホンジカの誘引捕獲の実績があり、誘引してからわなをかけるため、従来のくくりわなによる捕獲に比べて、わなの設置数と設置にかかる労力や見回りの負担を減らしながら捕獲効率が上がるという結果が出ていることから、坂庭氏が取り組む誘引捕獲手法について、低密度下における実証試験に取り組むこととした。

赤谷の森における誘引飼料はエリア内のニホンジカの嗜好性などを検証するため、ヘイキューブと鈹塩の2種類を使用し、ヘイキューブについては坂庭氏が考案した塩ビ管を使用した誘引器具を作成・設置した。

誘引試験は、赤谷プロジェクトエリア内でもセンサーカメラによるモニタリングで早くからニホンジカが確認され、他所と比べて撮影頻度が高く既にニホンジカが定着していると考えられる流域の2箇所にて平成27年5月19日から12月8日まで設置し、センサーカメラ（写真及びビデオ）により

ニホンジカの動向の季節変化や、誘引資材に対する嗜好性や反応を観察した。

(参考) <http://www.pref.gunma.jp/07/p13700501.html> : 餌による誘引効果の検証  
<http://www.pref.gunma.jp/07/p13700502.html> : ニホンジカの捕獲実証試験

## 3 取組の結果

ヘイキューブは、資材費が1基あたり約2000円と安価（制作のための機械費を除く）で、制作時間も1基あたり15分/人程度だった。また、設置は軽量のため一人でも可能で、立木を利用することとした。メンテナンスもヘイキューブの補充だけであり、センサーカメラの電池とSDカードの交換と合わせても約8分/箇所森林官等の日常の森林管理業務の中でも負担は少なく実施が可能と考えられた。

鈹塩は、雨滴の影響の度合いによって交換時期は異なったが2カ所とも全モニタリング期間で1回の交換であった。また、メンテナンスはセンサーカメラの電池とSDカードの交換のみであり約5分/箇所であった。

センサーカメラに写ったニホンジカの画像と動画を分析した結果、

- ・設置後から8月中旬まではヘイキューブ、鈹塩ともに誘引される個体はほとんどなかった（2カ所とも6月にメス1頭のみ）が8月下旬から撮影されるようになった。
- ・ヘイキューブよりも鈹塩による誘引が強い（試験地の植生がある程度豊かであることがいえるのではないかと推測される。）
- ・鈹塩に誘引された個体は約11～24個体と推測される。
- ・鈹塩は排他的な利用は見られなかった（連続して捕獲が可能と考えられる。）
- ・ヘイキューブは誘引される個体は確認できたものの減っていなかった。
- ・ヘイキューブに誘引された個体は約7～11個体と推測される。

ということがわかり、同じ個体が連続して複数回観察されるなど、捕獲に十分と考えられる誘引効果が得られた。

## 4 まとめ

誘引機器の作成、設置から見回りまでは専門的な技術は必要なく、一人でも可能である。また、同じ個体が連続して複数回観察されるなど、坂庭氏の赤城山での取組結果と同様に、わなの設置時期を見定めることで、見回りなどの負担を減らしながら効率的に捕獲が可能と考えられた。

今後は、誘引によるモニタリングを継続しニホンジカの動向を把握するとともに、地域関係者と連携した低密度管理を進めながら、また、課題となる止め刺しの手法を検討しながら誘引後の捕獲の実証試験を進めていきたいと考えている。



坂庭氏考案の  
誘引フィーダー



誘引されたニホン  
ジカのメス